甲状腺類似の組織像を呈した先天性側頸部嚢腫症例

東 瀬 浩 三・恩 地 浩 二・金 子 実・浜 田 隆 史*

A Case of Lateral Neck Cyst Similar to Thyroid Grand Tissue

H. Higase, K. Onchi, M. Kaneko, T. Hamada.

Department of Otorhinolaryngology Osaka City University, Medical School.
(Professor Kaoru Yamamoto),

The report was made on 35 years old female who had Congenital Lateral Neck Cyst without Fistula.

In pathological findings of extirpated cyst, it seemed to be thyroid gland tissue and partially to be carcinoma-like change.

We reported statistical study of congenital neck cyst in recent ten years.

最近我々は右頸部嚢腫で病理組織学的検索により甲状腺類似の先天性嚢腫で癌性の疑いある興味ある症例を経験したので報告する。

症

例

35才 女

初診日：昭和36年9月11日

入院日：昭和36年11月24日

主訴：右側頸部の無痛性腫脹および咽頭の異物感。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：17才の時に右結核性頸部リンパ腺の疑いで、量不明ではあるがX線照射を受けたことがある。

現病歴：約3年前より右側頸部に無痛性腫脹あるのに気付いていたが放置していた。此の腫脹は徐々にではあるが増大し、昭和36年春頃より咽頭部に腫脹感異物感を覚える様になつたがそれでも放置していた。たまたま鼻閉塞感あり某医を訪れた所、右咽頭部に腫脹があると云はれ本院を紹介された。

来院時所見：体格、栄養中等度、血液像、尿検査に異常を認めず Wa-R は陰性である。

局所所見は右側中咽頭から下咽頭にかけ側壁より突出する半球状の腫脹がある。表面の粘膜は僅かに発赤している程度で特に病的变化を認めない。腫瘍は弾性硬で波動を認めなかつた(第1図)。また右胸鎖乳突筋の前方で甲状軟骨の高さにおいて鶏卵大無痛性弾性硬の腫瘍がある。表面皮膚に発赤熱感等の異常を認めずまた表面皮膚の癒着も認めなかつた。

咽頭腫脹部を穿刺した結果透明淡黄色漿液性の内容

液が証明されたので約25cc排除しその後76%ウログラフィン10cc注入しX線撮影を行つた所第2図の如きやや右側よりの中咽頭より下咽頭にかけて円形の陰影を認めた。

入院時所見：諸種の都合により初診日より約2ヵ月を経過し入院した為か初診日所見と異なり、右咽頭部

第 1 図

* 大阪市立大学医学部耳鼻咽喉科学教室 (主任：山本 馨教授)

第 2 図

第 3 図

第 4 図

の腫脹は既に消失して認められず同部を穿刺しても内容物を証明することは出来なかつた。しかし右外側頸部には初診時と同様の腫瘍を認めたのでこの部を穿刺して以前に咽頭部穿刺により得た内容液と略々同様な淡黄色透明の液約 5 cc を排除し再び造影剤を注入したところ第 3 図のごときレ線像が得られた。このレ線写真によると注入された造影剤は頸部に局限し咽頭部との交通はない。頸部の囊腫上方にはうすく橢円形の像が上方咽頭部に続いてみられるが、これは前回注入し

た造影剤か、石灰沈着による像かは判定しがたい。しかしながら囊腫との関係は認められない。

手術時所見：右頸部腫瘍直上部皮膚に約 8 cm の縦切開を加え、前日に上記頸部穿刺部より注入したメチレンブルーを目標にして鈍的に周囲組織の剝離をすすめた所囊腫は胸鎖乳突筋の前深部にあり内側では胸骨舌筋、肩甲舌骨と癒着し頸動脈の直外方に位置していたが甲状腺および舌骨とは殊に関係を認めなかつた。なお囊腫周囲殊に内頸静脈に沿って数ケのリンパ腺腫脹と弛緩性肉芽を認めこれも同時に摘出した。初診時咽頭部に腫脹を認めていたのでこれを確める為ゾンデを挿入した所深部に腔所を認めたので最初の皮膚切開を更に約 3 cm 上方に延長した所、右顎下腺の深部に迄腔形成が見られたがその周囲には囊腫様上皮を認めず、灰

第 5 図

白色癰痕様で硬く、弛緩性肉芽が充満していたのでこれを除去すると共に周囲組織を充分に鋭匙にて搔爬し手術を終った。

摘出した標本は直径約4 cmのほぼ円形の嚢腫である(第4図)。

組織学的所見: 染色はヘマトキシリンエオジン染色法およびPAS染色法を使用した。その組織像はかなり不規則な多形の細胞が上皮性の集団を形成して増殖しており一部では管腔を形成する傾向を示し又一部では

第 6 図

乳頭状の像を呈し多種の像を示す。強拡大では核の異形性の顕著な事が明瞭で充実性で一層の配列あるいは乳頭状に増殖している像が明らかである。小管腔を形成する部分では一部内腔にエオジンで濃染する物質を入れその部分のPAS染色では陽性に染まり粘液染色では陰性である。形態学的特徴と合せ考えて甲状腺濾胞に類似を求め得る像であり、また周囲の被膜と思はれる部分では緻密な結合組織線維の層が見られ石灰沈着も一部に認められる(第5,6図)。

考

按

以上の所見より右先天性側頸嚢腫と診断する。本例はその病歴および局所所見より非炎症性嚢腫である事が推定されたのであるが頸部における非炎症嚢腫は比較的少く、先天性頸部嚢腫の他アテローム、淋巴嚢腫、甲状腺腫、副甲状腺腫等がある。以下本例との鑑別診断について述べるとアテロームは嚢腫壁と表面皮膚との間に癒着をみ、またいわゆる深在性アテロームとは内容物および組織学的検索により区別される。リンパ嚢腫は多房性で表面に凹凸があり、内容物がリンパ性であることから区別される。甲状腺腫とは本症例が手術時甲状腺と何等の関係を認めなかつたことから鑑別可能である。またHisの甲状腺舌管の残存により生ずる先天性正中嚢腫は甲状腺類似の組織像を示すものが多く報告されているがその存在部位は頸部の正中位にあり本症例の如く側頸部にあるものは稀で手術時甲状腺舌骨と関係のないことより、先天性正中嚢腫を否定することが出来る。副甲状腺腫は本来の甲状腺所在部より離れた位置に異所的に発見される甲状腺の腫瘍でありその発生機転については種々の説があるがこれが胎生期の発育過程における甲状腺原基の分離により生ずるいわゆる組織畸形分離腫と呼ばれるべきもので

ある事は多くの学者の一致した意見である。Getzowaによれば甲状腺側葉においては両側共第5咽頭嚢から分れたPost order Ultimobranchiale Körperが存在しこれが副甲状腺の原基であるとしている。この副甲状腺が嚢腫を形成した時即ち副甲状腺腫が側頸部に発生したばあい先天性側頸嚢腫と名付け得られるもので本例もその1つの例と考えられる。

しかし本例で奇異に思はれるのは初診時咽頭部に認めた腫脹が約2ヵ月後の入院時には消失し同部の穿孔によつて内容物を証明出来なかつた事、また入院時のレ線撮影で側頸部嚢腫上方にうすく橢円形の像を認めたがその内部にまで造影剤が入らなかつた事、手術時所見でも嚢腫の他に上方咽頭部に向う腔形成があり周囲組織は肉眼的には癰痕様で同部に内容物の貯溜を認めなかつたこと等の諸点である。これらの説明としては推定ではあるが嚢腫壁が何らかの原因で一次的に破れ抵抗性の少い組織間隙を通り流出した後、修復され外来時の穿孔によりその内容物が排除されたものか、また独立して2ヶの嚢腫が存在していたのかもしれない。これはあくまで推定の域を出ないことであり、御批判を仰ぎたい。

第1表 先天性正中頸嚢腫

報告者	年令性	発現年令	場 所	嚢 腫 の 性 状	病 理 組 織	年代
小 口	25 早	25才	前頸舌骨部	帯紫褐色不透明液	慢性甲状腺炎の像	1951
小 林	66 早	66才	甲状腺狭部	不詳	2〜3層の上皮 軽度の多核白血球浸潤	'52
森 脇	不 詳	不詳	不詳	不詳	一層の扁平上皮壁に Ca 沈着	'56
三 宅	21 早	幼少時	甲状腺部やや右 に偏す	7×3cm 淡褐赤色な液約10cc	胎性期甲状腺腫様	'52
鈴 木	33 早	27才	正中部 舌骨と関係	4.5×2.0壁薄く粘稠な液	筋センイ中に腺組織1〜2 層の絨毛円柱上皮	'59
加 藤	70 否	70才	不詳	不詳	不詳	'59
芦 沢	36 早	不詳	正中部	黄緑色の粘稠性液	低い円柱上皮, 単層扁平 上皮, 小管腔形成	'59

第2表 先天性側頸部嚢腫

報告者	年令性	発現年令	場 所	嚢 腫 の 性 状	病 理 組 織	年代
大 野	6 否	5才頃	不詳	鳩卵大, 帯褐色透明膠様 物質	不詳	1953
板 倉	29 早	27才	不詳	不詳	不詳	'55
板 倉	26 否	24才	左側頸部	膿性	不詳	'55
梅 垣	23 否	22才	右側頸部	白色乳麻様	重層扁平上皮, リンバ組 織	'57
疋 田	24 早	23才	左上頸三角部	鶏卵大, 汚穢黄褐色の泥 状物	重層扁平上皮, リンバ組 織	'57
横 井	10 否	7〜8才	左上頸三角部	帯黄色粘稠色	上皮を欠く	'58
真 銅	15 ?	5才頃	上頸三角部	透明且淡黄色の液体	未だ角化せぬ重層扁平上 皮, 胸腺様	'58
〃	13 否	12才頃	左下顎角	白色混濁性漿液	重層扁平上皮	'58
〃	55 早	54才頃	左前頸部で甲状 腺の稍下方左側	黒褐色の液	甲状腺様	'58
ト 部	16 否	12才頃	右	不詳	重層扁平上皮, リンバ組 織	'59
山 川	41 早	不詳	左咽頭側索部	ムチン	上皮を欠く, 軟骨様組織	'59

次に最近10年間に報告された耳鼻咽喉科領域の文献によると、先天性頸嚢腫は表に示す如く正中頸嚢腫7例(第1表)、側頸嚢腫は我々の症例を含めて12例である(第2表)。此の症例別は成書による正中嚢腫の方が多いという記載と反対の結果を示している。側頸部嚢腫中、甲状腺様構造を示すものは真銅の1例にすぎず。本例の如く原発性に悪性変化の像を示す症例は我々の調査した範囲の文献には1例も報告されていない。

結 語

35才早の先天性側頸部嚢腫症例で悪化の疑いある興味ある1例を報告し、同時に最近10年間の耳鼻咽喉科領域における先天性頸部嚢腫の統計的観察を試みた。

終りに御指導、御校閲を賜った山本馨教授に感謝申し上げます。
本論文の要旨は第112回日耳鼻大阪地方会において発表した。

参 考 文 献

- 1) 鈴江 壊：日本耳鼻咽喉科学全書 初版，日本医書出版，東京 昭28.
- 2) 高原高三：耳喉科 12, 44, 昭14.
- 3) 小口多聞：日耳鼻 54, 370, 昭26.
- 4) 小林幹郎：日耳鼻 55, 194, 昭27.
- 5) 三宅 弘：日耳鼻 55, 968, 昭27.
- 6) 大野 武：日耳鼻 56, 769, 昭28.
- 7) 板倉 孝：日耳鼻 58, 1207, 昭30.
- 8) 森脇良省：日耳鼻 58, 1336, 昭30.
- 9) 梅垣昭一：日耳鼻 60, 1337, 昭32.
- 10) 疋田紀代：耳鼻臨床 50, 879, 昭32.
- 11) 横井秀也：日耳鼻 61, 2080, 昭33.
- 12) 真銅 宏：耳鼻臨床 51, 720, 昭33.
- 13) 卜部敬白：日耳鼻 62, 585, 昭34.
- 14) 加藤 隆：日耳鼻 62, 853, 昭34.
- 15) 山川強四郎：日耳鼻 62, 2564, 昭34.
- 16) 鈴木安恒：耳喉科 31, 619, 昭34.
- 17) 芦沢明子：耳鼻展望 2, 64, 昭34.